

# 名詞句からの外置構文について

古川 武史

## 0. 導 入

(1)や(2)のような構文は名詞句から外置構文 (Extraposition from NP) と呼ばれ、同格節、関係節、前置詞句は主語もしくは目的語であるNPとをそれぞれ関連付けられる。

- (1) a. [<sub>NP</sub> a rumor] was spread [<sub>CP</sub> that Mary is in town]
- b. [<sub>NP</sub> a man] appeared [<sub>CP</sub> who had blond hair]
- c. [<sub>NP</sub> a man] appeared [<sub>PP</sub> with blond hair]
- (2) a. I spread [<sub>NP</sub> a rumor] yesterday [<sub>CP</sub> that Mary is in town]
- b. I saw [<sub>NP</sub> a book] yesterday [<sub>CP</sub> that everyone has read]
- c. I saw [<sub>NP</sub> a book] yesterday [<sub>PP</sub> about lazy pronouns]

本稿では、この(1)や(2)に見られるような名詞句からの外置構文に焦点を当て、最近の生成文法の枠組みにおいて仮定されている一般原理によって名詞句からの外置構文の派生やその統語的な特質がどのように説明され得るかを考察する<sup>1)</sup>

1節では名詞句から外置構文の統語的な振る舞いを考察する。2節において先行研究を検討し、3節では本稿における代案を提案する。4節は本稿の結語となる。

## 1. 名詞句からの外置構文の幾つかの特質

右方移動である名詞句からの外置構文は、*wh*移動などの左方移動が関与している構文とは異なった統語的な特質を示す。

第1に、(1)でみた様に、主語NPからの外置構文は文法的であるが、(3)の様  
に主語内部から*wh*要素は取り出せない<sup>2)</sup>

- (3) a. \*which actors would [<sub>IP</sub> [<sub>NP</sub> beautiful pictures of *t*] cost too much]  
 b. \*of which actors would [<sub>IP</sub> [<sub>NP</sub> beautiful pictures *t*] cost too much]

第2に、名詞句からの外置構文の依存関係はNPが文法関係を担っている文内部に範囲が限定される。

- (4) \*it was believed that [John saw [a pictures *t*] in the newspaper] by newspaper [of his brother]  
 一方wh移動は無境界的に移動することができる。  
 (5) who did [Mary say that [John saw [a picture of *t*] in the newspaper] ]

名詞句からの外置構文のような右方移動とwh移動のような左方移動の相違点に加えて、名詞句からの外置構文の持つ独特の特質を説明するために、様々な分析が提案されている。名詞句からの外置構文の派生は統語的な制約の適用を受けない文体的規則によるものとする分析 (Chomsky (1981, 1986 b) Rochmont (1978)), 移動によってではなく、名詞句と外置されている要素とを解釈原理で関連付ける接近法 (Guéron (1980) Guéron and May (1985) Culicover and Rochmont (1987, 1990a, 1990b)),  $\alpha$  移動の一例としての統語的な移動であるとする提案 (Baltin (1981, 1983, 1984, 1987), Johnson (1985), Nakajima (1985, 1989)) 等がある。

本稿では統語的な移動であると仮定して、以下の先行研究を検討する。<sup>3)</sup>

## 2. 先行研究

名詞句からの外置構文のようなある要素を文の後方に動かす操作、すなわち、右方移動の着地点を保証するために、色々な分析が提案されているが、ここでは Nakajima (1989) の分析を検討する。

### 2.1 Nakajima (1989)

Nakajima (1989) は名詞句からの外置が(6)にあるように典型的な指定

主語の条件 (Specified Subject Condition) の効果を示すという観察に基付き、右方移動によって残された痕跡は照応形であると仮定し、従って、束縛理論の条件Aにより、束縛範疇内で束縛されなければならないとした。

(6) a. [<sub>IP</sub> I bought [<sub>NP</sub> a book *t*] yesterday [about French cooking] ]

b. \* I bought [<sub>NP</sub> John's book *t*] yesterday [about French cooking]

(7) A trace left by rightward movement is bound in its binding category. (Nakajima (1989))

(8)  $\beta$  is a binding category for  $\alpha$  if and only if  $\beta$  is the minimal category containing  $\alpha$  and a SUBJECT accessible to  $\alpha$ .

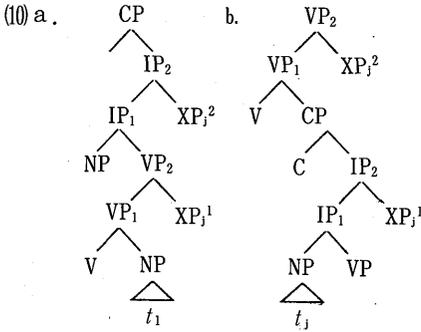
(Chomsky (1981) 220)

外置などの右方移動は付加 (adjunction) 移動とすると、(9)にあるように基本的には循環的に移動することが可能であるが、文法の一般的な原理である束縛理論による制約(7)を受けることによって、右方移動の局所性を説明している<sup>4)</sup>

(9) Adjunction is possible only to a maximal projection that is nonargument.

Nakajima (1989) の理論が実際にはどのような予測をするのか考察する。(10a)にある痕跡  $t_i$  の束縛範疇は痕跡と主語NPを含む最小の範疇はIPである。従って、その内部では、VPに付加した場合にのみ、目的語の内部にある痕跡  $t_i$  が束縛され、条件A(7)を満たす。一方、IP自体に付加した場合、すなわち、 $XP_i^2$ が先行詞の場合は、同じように最小の範疇IP内にあると考えられるが、支配 (domination) の定義をChomsky (1986b) に従って、すべての切片 (segment) に支配された場合を支配するというならば、IPに付加した場合、 $XP_i^2$ はIPには支配されておらず、束縛範疇外となり、条件A(7)を満たさないことになる。また、Nakajima (1985) に従うとCが接近可能な主語になるので (10b)にあるように、主語位置からの外置の痕跡  $t_i$  は、CP内部で束縛されなければならない<sup>5)</sup> よって、IPに

付加した場合、即ち、 $XP_j^1$ のみによって、痕跡 $t_j$ は適正に束縛される。<sup>6)</sup>



NP内部から外置された要素が構造上どの位置に付加されているか否かは、VP前置 (VP-topicalization) やVP削除 (VP-ellipsis) や疑似分裂文化 (Pseudo-clefting) などの規則の適用を受ける例を考察することにより、Nakajima (1989) が予測する結果を支持しているのが分かる。<sup>7)</sup>

主語NPから外置された要素はVPではなく、IPに付加されているので、VPと共に前置されたり、削除されると、非文になる。<sup>8) 9)</sup>

(11) a. John said that a man [(who was) from Boston] was seen last night and [VP seen] [IP [NP a man t] was [VP e] last night [(who was) from London] ]

b. \*John said that [a man t] was seen last night [(who was) from London] and [VP seen last night [(who was) from London] ] [ [a man t] was [VP e] ]

c. \*John said that a man was seen last night [(who was) from New York] and [VP seen [(who was) from New York] ] [ [a man t] was [VP e] last night ]

(12) a. [a man [(who was) from Boston] ] was seen last night [before [a lady [(who was) from Boston]]was [VP e] ]

b. \* [a man t] was seen last night [(who was) from Boston] before [a lady t] was [VP e] ]

c. ? [a man t] was seen last night [(who was) from Boston] ]

---

before [a lady *t*] was [<sub>VP</sub> *e*] from Boston

又、主語NPから外置された要素は疑似分裂文の焦点の位置にVPと共に起できない。

(13) a. \*what someone did was come into the room who lived in Boston

b. \*what someone did was come into the room with blue hair  
これらのことから主語NPから外置された要素はVPよりも上に付加していることを示している。

更に、次を見よ。

(14) a. which book<sub>i</sub> has [<sub>IP</sub> [<sub>IP</sub> [a review *t*<sub>j</sub>] come out] [<sub>PP</sub> of *t*<sub>i</sub>]<sub>j</sub>]

b. which topics<sub>i</sub> have [<sub>IP</sub> [<sub>IP</sub> [discussion *t*<sub>j</sub>] occurred  
[<sub>PP</sub> about *t*<sub>i</sub>]<sub>i</sub>] (Fiengo (1980) 153, 155)

ここでは二つの可能性が考えられる。もし主語NPから外置されたPPがIP内部にあるとすると、(14)のPPと、PPからの継承によってIPがそれぞれ障壁となり、下接度2 (2 subjacent)となり、境界理論は間違っ非文であると予測する。もう一つの可能性として、Nakajima (1989) のように、主語NPから外置されたPPはIPに付加されているとするならば、IPはPPを直接支配していないので、PPのみが障壁となり、(14)を容認可能な文であることが予測できる。従って、主語NPから外置された要素は、IP内部にあると仮定するよりも、IPに付加していると考えの方が妥当である。

目的語NPから外置された要素に関しては、VP前置、VP削除の適用とともに受ける。しかし目的語NPから外置された要素を残してVPが削除される場合、目的語NP内部にある外置された要素の痕跡も削除され、虚量化 (vacuous quantification) となって非文となる。

(15) I said that she read [a book *t*] yesterday about East Timor,  
and [<sub>VP</sub> read [a book *t*] yesterday [about East Timor] ] she did  
[<sub>VP</sub> *e*]

(16) a. John met [a man *t*] last week [(who was) from Paris] ,  
and George {met [a man *t*] last week [(who was) from

Paris] / did [VP e] } too

- b. John said he would meet [a man t] last week [(who was) from Paris] and George {met [a man t] / \*did [VP e] } [(who was) from New York]

目的語NPから外置されたPPがVPと共に疑似分裂文の焦点に生起できる。

- (17) what John did was [VP draw [a picture t] on the wall [of his brother] ]

以上の一連のデータから、目的語NPから外置された要素はVP内部にあることが言える。

更に、目的語NPから外置されたPPからはwh移動によって要素を取り出すことができない。

- (18) a. who<sub>i</sub> did [IP you [VP t<sub>i</sub>' [VP show [NP a picture of t<sub>i</sub>] yesterday] ] ]  
 b. \*who<sub>i</sub> did [IP you [VP [VP show [NP a picture t<sub>j</sub>] yesterday] [PP of t<sub>i</sub>]<sub>i</sub> ] ]

VP内部に外置されたPPがあるならば、PPが障壁にはなるが、who<sub>i</sub>がPPを越えた後、VPに付加することができ、それによってVPの障壁性を回避することができる。従って、この移動では障壁PP 1つのみしか越えていないことになり、文法性が正しく捕えられない。

Nakajima (1989) のように、もしVPに付加されているとするならば、PPに加えてIPが継承により障壁になる。従って、who<sub>i</sub>が障壁を2つ越えることになり、下接度2として(18b)の逸脱性が正しく説明できる<sup>10)</sup>

これらの事実より、Nakajima (1989) の予測通りに、主語NPから外置された要素はIPに、目的語NPから外置された要素はVPにそれぞれ付加していることが言える。

主語位置からの外置が可能であることを説明するために、Nakajima (1989)はDP分析を採用している<sup>11)</sup>それによると、DPが項であり、DPの補部であるNPは項ではない。従って、(19a)は(19b)のようになり、項ではない、NPに付加が可能であると仮定している。

- (19) a. [ [ [a review  $t$ ] in  $LI$ ] of John's new book] was read  
 b. [<sub>DP</sub> a [<sub>NP</sub> [<sub>NP</sub> [<sub>N</sub> review  $t$ ] in  $LI$ ] of John's new book] ] ...

更に、DPは、IPの場合に仮定されているように、内在的な障壁 (inherent barrier) または最小障壁 (minimality barrier) にならないと仮定している。従って、主語NPからの外置構文は(20)のような派生過程を経る。

- (20) [<sub>IP</sub> [<sub>IP</sub> [<sub>DP</sub> a [<sub>NP</sub> [<sub>NP</sub> book  $t_i$ ]  $t_i'$ ] ] ] appeared [<sub>CP</sub> which John wrote]<sub>i</sub> ] ]

## 2.2 . Nakajima ( 1989 ) の問題点

しかしながら、Nakajima (1989) のDP分析を採用すると、理論上の問題が生じる。主語位置からの $wh$ 移動が関与している例文(21)には通常下接の条件違反として排除される接近法が取られているが、Nakajima (1989) ではこの事実がうまく説明できなくなる。

- (21) \* [<sub>CP</sub> who<sub>i</sub> did [<sub>IP</sub>(=<sub>BAR</sub>) [<sub>DP</sub>(=<sub>BC</sub>) [<sub>NP</sub>  $t_i'$  [<sub>NP</sub> pictures of  $t_i$ ] ] ] ]  
 bother Tom] ]

NPはLマークされない。従って、NPはBCとなり、障壁になる。しかしながら、Nakajima (1989) に従うと、NPは是非項なので、(8)の規定からNPに付加することができ、それによって障壁性を回避することができる。また、DPは、Lマークされていない場合、IPと同じようにBCにはなり得るが、障壁にはなり得ない。IPはBCであるDPを直接支配しているので継承によってIPが障壁となる。従って、主語NPからの外置を説明するためにNakajima (1989) の分析を採用すると、主語内部から $wh$ 要素の抽出は唯一障壁IP 1つのみしか越えず、下接の条件違反にはならないことになり、間違った文法性を予測する。<sup>12)</sup>

また、Nakajimaの反例として、一般に、他動詞の主語からPPの外置(22)や補部節の外置(23)は許されない事実がある。

- (22) a. \* [a man  $t$ ] saw/met/hit/paid/remembered/etc. me  
 [from Nuie]  
 b. \* [a man  $t$ ] put a picture on the table [from the flea

market]

- (23) a. \* [a rumor *t*] means that Gary is wrong [that Mary is in town]  
 b. \* [a proof *t*] implies that Godel was lazy [that Godel's Incompleteness Theorem is incomplete]

3番の問題点として、関係節が名詞句から外置される場合、他の要素が外置される場合と異なった特質を示す。この事実はNakajimaの接近法で説明ができない。まず、(24)と(25)の対比で明らかのように、関係節を外置する場合、指定主語の効果を示さない。

- (24) a. I met [a/your friend *t*] yesterday [who knows everything about everything]  
 b. I bought [a/my book *t*] along [that tells everything about everything] (Johnson 107 (69a-b))
- (25) a. I spread [a/\*your rumor *t*] yesterday [that Mary is in town]  
 b. I read [a/\*your proof *t*] last night [that Godel's Incompleteness Theorem is incomplete]

更に、他動詞の主語からなんらかの要素を外置する場合、PPの外置(22)と補部節の外置(23)の場合とは異なり、関係節の外置(26)は、幾分文法性が上がる。

- (26) a. ?? [a man *t*] knows Godel [who understand his Incompleteness Theorem]  
 b. ?? [a woman *t*] said that Gary had arrived [who knew him quite well] (Johnson (1985) 107)

以上の分析やその問題点を考慮に入れ、なぜ名詞句からの外置構文の局所性が名詞句が文法関係を担っている文に限られているか、また、なぜ主語位置からの外置に動詞の種類に応じて文法性の差が存在するのかを考察する。

### 3. 代案

名詞句からの外置構文には統語的な右方移動が関与しているならば、この構文が示す特質は一般的に仮定されている文法の一般原理によって説明され得るはずである。従って、名詞句からの外置は付加によって派生されるとすると、(9)にあるように付加の操作は非項である最大投射のみに可能である。そうすると、もし名詞句からの外置構文に循環的に付加移動が適用されると、外置された要素と名詞句内部に残された痕跡との局所性を正確に捕え得ることができなくなる。

(27) \* it was believed that John saw a picture in the newspaper by  
everyone of his brother

そこで、外置の境界性に関する理論として、先程考察したNakajima (1989) の束縛理論による接近法を取ることにする。<sup>13)</sup>

そこで、Nakajima (1989) の問題点の1つとして考察したように、関係節の外置は他の外置とは異なった特質を示す事実に関して、本稿では関係節の解釈は、叙述規則 (rule of predication) によって行われると仮定し、従って、先ほど考察した一連のデータから、必ずしも関係節の外置の場合移動が関与しているとは言えないことをここで示唆しておく。<sup>14)</sup>

Nakajima(1989)の分析において解決されなければならない問題点が2点残る。動詞によって主語NPからの外置構文に文法性の差が観察されるのは何故なのか。また、このような動詞においてECPや下接の条件に違反する事なく、主語NPからの外置が可能なのは何故なのか。これらの問題を解決するために、主語NPからの外置が示す特質を考察し、Nakajima (1989) の問題点やこれらの特質をECPによって説明することを提案する。

#### 3.1. 主語名詞句からの外置構文の特質

主語位置にあるNPからPPや補部節の外置がある特定の環境によってのみ認可されるのは何故なのかという問題に答えるまえに、以下どのような環境にある場合に主語NPからの外置が認可されるのかを考察する。

純粹な自動詞 (pure intransitive verbs) の場合、他動詞の場合(22)(23)と同様に、主語NPからPPを外置するのは不可能である。

- (28) a. \*a man whispered/screamed/conversed/etc. from Nuie  
 b. \*a man ran/walked/jumped/drove/etc. from the EPA  
 c. \*a man hiccuped/coughed/vomited/drank/etc. from the EPA

主語NPからPPの外置が認可される現象は、(29)にあるように受け身文の場合も主語位置からの外置が許される。

- (29) a. a man will soon say that pictures were taken of Madonna  
 b. whose publisher claimed that books were sold about Cantor's  
 c. NOBODY insisted that stories be published about the ECP  
 非対格動詞(unaccusative verbs)あるいは能格動詞(ergative verbs)

と呼ばれる動詞の場合にも、主語NPからのPPの外置は認可される。

- (30) a. man appeared from Tanzania  
 b. a storm followed from the North  
 c. books arrived at the store about Hammett's life  
 d. a picture stands in the hallway by Picasso

非対格動詞は*there*構文を認可する動詞であることは一般的に知られている。

- (31) a. there appeared men from Tanzania  
 b. there followed storm from the North  
 c. there arrived books about Hammett's life at the store  
 d. there stands a picture by Picasso in the hallway

*there*構文の派生については、Belletti (1988) やChomsky (1988) の分析に従い、主語位置は基底 (base) では空 (empty) であり、非対格動詞に後続する名詞句は動詞の内部項 (internal argument) であり、基底では動詞と姉妹の関係 (sisterhood relation) にあるとする。従って、(30)の主語は、受け身文の場合と同じように、動詞と姉妹関係にある位置か



Nakajima (1989) に従うと、束縛理論を満たすために主語NP内部から外置されたPPはIPに付加されなければならないが、しかしJohnson (1985) の(34)のような派生に関する分析が取られるならば、外置されたPPはVPに付加せずに、いっきにIPに付加され、この移動は障壁であるVPを越えてしまう。<sup>18)</sup>従って、下接の条件により、VPの障壁性を回避するために、一旦VPに付加して、IPに付加されなければならないことになり、次のようなSS表示となる。

- (36) [IP [IP [NP a book  $t_i$ ] ] ] [VP [VP was bought  $t_j$ ]  $t_i'$ ] ]  
 [about Cantor's] ] ]

しかしながら、ECPによりLFにおいて痕跡は適性統率されなければならないが、主語位置はLマークされておらず、障壁となる。Nの補部節は別にして、PPは補部というよりも、付加詞的であるので、PPにとってNは主題役割を付与する姉妹関係にある要素ではない。すなわち、痕跡はNによって適正統率はされないことになる。また、先行詞と痕跡の間に障壁すなわち、主語NPが介在するので、先行詞統率が満たされずに、ECPを破ることになり、非文と予測されるはずである。

主語位置からのPPや補部節の外置における動詞による文法性の相違は、基底でLマークされているか否かである。この違いをECPと再構成(reconstruction)によって説明することをここで提案する。

再構成とは移動の適用を受けた要素を元の位置すなわち痕跡の位置へ戻す操作であるが、次のような例からも認めなければならない操作である。<sup>19)</sup>

- (37) [AP how likely  $t_i$  to [VP win] ] ] ; is John<sub>i</sub>  $t_j$

$t_i$ は、 $\theta$ 役を付与するVPと姉妹関係にないので、 $\theta$ 統率されない。よって、先行詞統率されなければならないが、John<sub>i</sub>は $t_i$ をC統御しない。先行詞統率されるためにはAPを基底位置の痕跡 $t_i$ の位置に戻す操作である再構成を適用しなければ、ECP違反となる。

名詞句からの外置構文の場合を考察してみよう。痕跡の位置に戻す操作である再構成がLFにおいて適用されると仮定すると、(36)のLF表示は(38)のようになる。

- (38) [IP [IP  $t_i$  [VP [VP was bought [NP a book  $t_i$ ] ] ]  $t_i'$ ] ]  
 [about Cantor's] ]

そうすると、名詞句に残った痕跡 $t_i$ は先行詞統率され、ECPを満たす。ところが、再構成の操作で残った主語位置の痕跡 $t_i$ は $\theta$ 統率も先行詞統率もされずに、このままで再びECPによって非文として排除されてしまう。そこで、主語位置の痕跡 $t_i$ は文法の他の原理から存在が要求されないから、消去できる。<sup>20)</sup>従って、(36)のLF表示は次のようになる。

- (39) [IP [IP [e] [VP [VP was bough [NP a book  $t_i$ ] ] ]  $t_i'$ ] ]  
 [about Cantor's] ]

痕跡 $t_i$ ,  $t_i'$ はおのおのの先行詞との間に障壁が存在しないので、先行詞によって統率され、ECPを満たすことになる。

一方、(40)のような基底から主語位置に生成される名詞句からの外置の場合は、先ほどの再構成の操作が適用されないので、主語NPがLマークされずに障壁となり、痕跡は先行詞統率されない。従って、非文として排除される。

- (40) \*[IP [IP [NP a book  $t_i$ ] [VP fell] ] ] [PP about Cantor's] ]

しかしながら、他動詞の主語内部から名詞Nの補文が外置された場合、ECPによる説明は間違っって文法的であると予測する。

- (41) \*[IP [IP [NP a rumor  $t_i$ ] means that John is right]  
 [CP that Mary knew Chomsky well] ]

補文の痕跡 $t_i$ は主語NPが障壁となり、先行詞統率されないが、しかし *rumor*によって $\theta$ 統率され、ECPを満たすことになる。

そこで、名詞Nの補文と動詞Vの補文との文法的な振る舞いを比較検討する。<sup>21)</sup>

動詞Vの補文は義務的に要求されるが、一方名詞Nの補文は随意的である。

- (42) a. the announcement/conclusion (that an investigation has  
 been initiated) was inaccurate  
 b. \*they announced/\*they concluded

名詞の補文の補文化詞 (Complementizer) *that* は省略することができない。

(43) a. the announcement \* (that) the answer was obvious was accurate

b. John announced (that) the answer was obvious.

$\theta$  統率されている場合には補文化詞は随意的であるというように、 $\theta$  統率によって補文化詞の分布を説明する分析を採用すると、必然的に、*wh* 句の取り出しに関する事実をもうまく取り扱える。Nの補文であるCPは項ではあるが、Nによって $\theta$  付与されないので、Lマークされず障壁となり、継承によってNPも障壁となる。*wh* 移動は、下接度2となり、(44)のように容認性が下がり、弱い島の効果 (weak island effect) が得らる。

(44) a. (?) which book did John announce [<sub>NP</sub> a plan [<sub>CP</sub> (for you) to read *t*] ]

b. (?) with whom did John announce [<sub>NP</sub> a plan [<sub>CP</sub> to go out *t*] ]

(45) a. which book did John plan [<sub>CP</sub> to read *t*]

b. with whom did John plan [to go out] *t*]

以上のことにより、Nの補文CPは項ではあるが、Nによって補文CPは $\theta$  マークされない (defective  $\theta$ -marking) と仮定する。従って、(41)の場合、痕跡 $t_i$ はNに $\theta$  統率されない。また、先行詞CPにも $t_i$ は統率されないので、ECP違反となって排除される。

## 結 語

本稿では移動として名詞句からの外置構文を分析し、そのさまざまな統語的特質を考察した。

名詞句からの外置構文の境界性を規定する理論として、Nakajima (1989) の束縛理論を採用した。それに従うと、(46)における $t_i$ は束縛範囲内で束縛されないで、非文となる。

(46) \*it was believed [that [a review *t*] would appear in *LI*] by

everybody [of *Barriers*]

なぜ特定の動詞に限定はされるが主語位置からの外置が許されるのかという問題については、派生主語の場合にのみに主語NPからの外置が可能であり、この事実は、ECPの違反を逃れる為に、LFにおいて派生主語の基底位置に戻す操作である再構成を採用した。

本稿の分析に従うと、名詞句からの外置構文(47)は(48)のようなLF表示をもつ。

(47) a. [<sub>IP</sub> [<sub>IP</sub> [a man  $t_i$ ]<sub>i</sub>] [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> appeared  $t_i$ ]  $t_i'$ ]] [with long hair]<sub>i</sub>]

b. \* [<sub>IP</sub> [<sub>IP</sub> [a man  $t_i$ ] hit Mary] [with long hair]<sub>i</sub>]

c. [<sub>IP</sub>I [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> saw [a picture  $t$ ]in the paper] [of Mary] ] ]

(48) a. [<sub>IP</sub> [<sub>IP</sub> [e]<sub>i</sub>] [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> appeared [a man  $t_i$ ]  $t_i'$ ] [with long hair]<sub>i</sub>]

b. \* [<sub>IP</sub> [<sub>IP</sub> [<sub>NP</sub> a man  $t_i$ ] hit Mary] [with long hair] ]

c. [<sub>IP</sub>I [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> saw [a picture  $t$ ]in the paper] [of Mary] ] ]

(47a)はSSで束縛理論により外置された要素はIPに付加される。そのLF表示は再構成の結果 (48a) となり、外置の痕跡 $t_i$ は先行詞統率され、ECPを満たす。一方、(47b)の場合は束縛理論よりIPに付加されているが、再構成の適用を受けないので、LF表示はSSと同一の (48b) である。さらにECPからは主語NPが障壁となり、痕跡 $t_i$ は先行詞統率されずに、ECP違反となる。(46c)は束縛理論により目的語から外置された要素はVPに付加されているので、(47c)のようなLF表示となり、先行詞統率を満たす。

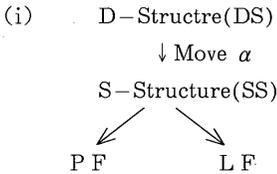
## 注

1. 本稿ではChomsky (1986 b) の枠組を採用する。基本的な理論や概念の定義はそれに従っている。
2. (3)の非文法性は規則(移動)にかかる条件で、下接の条件(Subjacency Condition)と呼ばれるものによるものである。これによると障壁(barrier)を越えるたびに下接度が上がり、2つ以上越えると非文法的となる。従って、

(3)の非文法性の理論的な説明は次のとおりである。主語NPから $wh$ 移動によって要素を取り出す場合、その主語NPがLマークされていないので、障壁となり、そのNPを直接支配しているIPが継承により障壁となるために、障壁を2つ越すことになり、下接度2となり、従って非文となる。

3. 叙述規則 (rule of predication) や補部原理 (complement principle) などの解釈規則によって外置された要素と名詞句を関連付ける接近法への反論は Johnson (1985), Kroch and Johsi (1987) を参照。また3.1. 節で扱う名詞句からの外置構文特質は解釈規則によって説明できず、問題となる。

更に、本稿ではChomsky (1981) に従い、表示のレベル (Levels of Representation) は次のように仮定する。



(Phonetic Form) (Logical Form)

名詞句からある要素を外置するという操作がどの表示のレベルで適用されているかは、否定対極要素 (negative polarity item) が主語内部にある場合非文となるが、名詞句からの外置構文の場合は容認可能な文となるという事実からの既決から導き出される。

- (i) a. \* [the names of any of those composers] weren't called out yet  
 b. [the names] weren't called out yet [ of those composers]

このことは否定対極要素の解釈は、文の意味解釈が行われるLFで行われるので、名詞句から要素を外置する操作は、PFで適用される文体的な移動ではなく、すなわち、LFの入力であるSSの段階で適用されていることを示している。

4. 束縛関係は名詞句からの外置構文には関与しないかもしれない。他の移動現象と同じように定効果 (definiteness effect) を示すとして捕らえ直すことができるかもしれない。

- (i) a. \*I remember [John's friend  $t_i$ ] yesterday [from Chicago]  $_i$   
 b. \*who $_i$  did you remember [John's friend of  $t_i$  ]  
 c. who $_i$  did you remember [a friend of  $t_i$  ]

しかし、移動が関与する場合に、なぜ定効果は生じるのか、また、束縛理論が名詞句から外置の境界性を規定しないならば、どのような手段で名詞句からの外置境界性は説明されるのか、問題が生じる。ここではこれ以上定効果の問題は論じない。

5. Cが接近可能なSUBJECTになり得るという主張を支持する議論はNakajima(1985)を参照。

6. 束縛にはM統御ではなくC統御が関与することに注意。名詞句内部において、NP移動によって残った痕跡が移動されて要素をM統御するからである。

(i) the city<sub>i</sub>'s destruction t<sub>i</sub>

もし束縛の定義にM統御が組み込まれるならば、痕跡<sub>i</sub>がthe city<sub>i</sub>を束縛してしまい、束縛原理Cに違反する。

7. 照応形に関係する事実も同じ結論を支持する。詳しくはCulicover and Rochemont (1990) Johnson (1985)等を参照のこと。

8. VP削除やVP繰り上げの後に残った空範疇は $e$ と表している。

9. もし強調のための強勢 (emphatic stress) が主語NPに置かれると、(12b)のような動詞句削除のデータの文法性が上昇する。このことにより一連のCulicoverとRochemontの論文では主語位置から外置された要素はVPにも付加されてもよいとしている。

しかし、(i)により文副詞はIPに付加されていると考えられるが、文副詞はVPと共に削除の適用を受ける場合(ii)もある。

- (i) a. necessarily, two plus two will equal four  
b. two plus two necessarily will equal four  
c. two plus two will necessarily equal four  
d. \*two plus two will equal four necessarily  
d. \*necessarily, what will two plus two equal

(ii) two plus two will necessarily equal four and one plus three will [VP e], too (e=necessarily equal four)

従って、必ずしもVP削除は要素が構造上どこにいるかを明らかにするテストとは言えない。

10. もしVP付加が可能であるならば、障壁を1つのみしか越えない。そこでCinque (1990)のように障壁を1つでも越えた場合、非文になるとすると、(18)の文法性の対比がうまく捕らえられない。

11. DP仮説の動機付はFukui (1986)を参照のこと。

12. そこでNakajima (1989)は最も埋め込まれたPPは弱い障壁になると規定している。もしNがPPをLマークしないならば、PPは付加詞と考えるべきであり、そうするとECPによって排除されるはずであるが、事実は予測に反する。

(i) ? [ CP about what did [ IP (=BAR) [ DP (=BC) a[ NP t' [ NP book t ] ] appear ] ]

つまりIPがD0からの継承によって障壁となり、*t'*が $\theta$ 統率も先行詞統率もされないので、ECP違反と間違っNakajima (1989) の仮定は予測してしまう。

13. しかし本稿の提案ではDP仮説は採用しない。
14. 詳しい議論はJohnson (1985) を参照。また叙述規則の接近法は一連の CulicoverとRochemontの論文やGueron and May (1985) を参照。また、関係節の解釈はClark (1990) を参照のこと。

15. 詳しくはBelletti and Rizzi (1988) を参照。

16. 純粋な自動詞も適切な談話において主語位置からの外置を許す場合がある。

- (i) first man with a green parachute jumped, and then a man jumped with a brown parachute

しかし、このような動詞の主語位置に否定対極要素を含んだ場合、外置が適用されても、されなくても非文法的である。このことは文体的な規則すなわちPF現象であることを示している。詳しくは注の3を参照。

- (ii) a. \*first a man from the Air Force refused to jump, and then a man from anywhere wouldn't jump

b. \*... and then a man wouldn't jump from anywhere

17. Johnson (1985) が正しいとすると、右左移動の境界性の違いは下接の条件によるものとなるが、しかし、名詞句からの外置構文に關与している操作は構造保持仮説(Structure Preserving Hypothesis)を守る置換(substitution)というよりも付加であるので、*wh*移動と同じように循環的に最大投射の非項に付加して行くことが可能である。従って、付加という操作は1回しか適用されないというad hocな規定を設けなければならない。

18. Johnson (1985) に従うと、VPは障壁ではない。また、切片も障壁になるので、(14)(18b)の文法性の相違がうまく捕えられない。

19. 更に再構成は語彙的な照応形においても必要な操作である。

- (i) a. [ which picture of himself<sub>i</sub> ]<sub>i</sub> does John like <sub>t<sub>i</sub></sub> best

b. himself<sub>i</sub>, John loves <sub>t<sub>i</sub></sub>

これらの統語的な現象についての理論的な議論はBarss (1986) およびSaito (1989) を参照。

20. 詳しくはChomsky (1988) を参照。

21. 以下の主張はStowell (1981) に従っている。さらに動詞と派生名詞の補文の統語的、意味的相違点はGrimshaw (1990) によって詳細に議論されている。

---

参考文献

- Baltin, M. (1981) 'Strict Bounding,' in C. L. Baker and J McCarthy, eds., *The Logical Problem of Language Acquisition*, MIT Press.
- \_\_\_\_\_ (1983) 'Extraposition: Bounding vs. Government-Binding,' *LI* 14 155-162.
- \_\_\_\_\_ (1984) 'Extraposition Rules and Discontinuous Constituents,' *LI* 15, 157-163.
- \_\_\_\_\_ (1987) 'Do Antecedent-Contained Deletion Exist?' *LI* 18 579-596.
- Barss, A. (1986) *Chains and Anaphoric Dependence*, Ph. D. Dissertation, MIT.
- Belletti, A. (1988) 'The Case of Unaccusative,' *LI* 19 1-34.
- Belletti, A. and L. Rizzi (1988) Psych-Vers and Theta-Theory, *NLLT* 6. 291-352.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.
- \_\_\_\_\_ (1986a) *Knowledge of Language*, Pasaeger.
- \_\_\_\_\_ (1986a) *Barriers*, MIT Press.
- \_\_\_\_\_ (1988) 'Some Notes on Economy of Derivation and Representation,' ms. MIT.
- Cinque, G. (1990) *Types of A'-Dependency*, MIT Press
- Clark, R. (1990) *Thematic Theory in Syntax and Interpretation*, John Benjamin.
- Fiengo, R. (1980) *Surface Structure*, Harvard University Press.
- Fukui, N. (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*, Ph. D. Dissertation, MIT.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press.
- Gueron, J. (1980) 'On Syntax and Semantics of PP Extraposition,' *LI* 11. 637-678.
- Gueron, J. and R. May (1984) 'Extraposition and Logical Form,' *LI* 15 1-31.
- Johnson, K. (1985) *A Case for Movement*, Ph. D. Dissertation, MIT.
- Huck, G.J. and Y. Na (1990) 'Extraposition and Focus,' *Lg*. 66. 51-77.
- Kroch, A. and A. Joshi (1987) 'Analyzing Extraposition in a Tree Adjoining Grammar,' in G. Huck and A. Ojeda (eds.), *Syntax and Semantics vol. 20; Discontinuous Constituency*, Academic Press.

- Nakajima, H. (1989) 'Comp as a SUBJECT' *TLR* 4, 121-152.
- \_\_\_\_\_ (1989) 'Bounding of Rightward Movements,' *LI*. 20. 328-335.
- Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press.
- Rochemont, M. (1978) *A Theory of Stylistic Rules in English*, Ph. D. Dissertation, University of Massachusetts.
- Rochemont, M. and P. Culicover (1987) 'A Non-movement Analysis of Extraposition from NP,' ms.
- \_\_\_\_\_ (1990 a) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_ (1990b) 'Extraposition and the Complement Principle,' *LI*. 21. 23-47.
- Saito, M. (1989) 'Scrambling as Semantically Vacuous A'-Movement' in M. Baltin and A. Kroch (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, University of Chicago Press.
- Sportiche, D. (1988) 'A Theory of Floating Quantifiers and its Corollaries for Constituent Structure,' *LI*. 19. 425-449.
- Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*, Ph. D. Dissertation, MIT.
- Wittenburg, K. (1987) 'Extraposition from NP as Anaphor,' in G. Huck and A. Ojeda (eds.), *Syntax and Semantics vol. 20; Discontinuous Constituency*, Academic Press.